

フランス・スペイン再訪記

原田 義則(3 組)

コロナ蔓延前まではテニスのグランドスラム観戦をメインにした家内との旅行を年に 1 回程度はしていたのですが、この 6 年間は全く出掛けませんでした。ところが、この春、NHK-BS で放送している「世界ふれあい街歩き」、「世界入りにくい居酒屋」を見ていて、急にヨーロッパの小国巡りのちょっと長い旅に行きたくなり、家内を誘ったのですが、「移動の多いパック旅行は疲れるから嫌だ」、「エコノミー席では眠れない」などと不満が続出したので、ちょっと高くはなりますが「行きたい所だけを巡るカスタム旅行」を企画しました。結局、「娘と私の共通の趣味であるワインの醸造所巡りとバスク地方の料理を楽しむゆったりとした旅」と言うコンセプトに纏まり、娘を中心にして具体的なルートとスケジュールを設計しました。尚、バスクを選んだのは私たち家族（娘はパリ生まれ）がパリ近郊に住んでいた時の大家（床屋の親父）がバスク人で盛んにバスクのことを自慢していたからです。

娘は仕事と遊びで私以上に最新スタイルの（全てがオンラインで済む）海外旅行には慣れていて、カスタム旅行の手伝いをしてくれる現地の旅行代理店の支援を受けつつ、ウェブ経由で飛行機・列車の予約、宿の予約、レストランの予約をしてくれました。現地の旅行代理店には希望したワイナリーの訪問予約の他、英語の分かるドライバー付きの専用の大型車による移動支援を要請しました。ガイドは無し。

旅程は羽田からパリ経由でツールーズ（搭乗したエアバスの本社所在地）に行き、2 泊。市内観光の後、車でヨーロッパ最大の古城のあるカルカソンヌを往復、次いで列車でボルドーに移動し、3 泊。ワイン博物館などの市内観光の他、ボルドー近郊の有名ワイナリーを 3 カ所訪問し、ゆったりと見学と試飲。次いで、車でビアリッツ経由でバイヨンヌに行き、2 泊。市内観光の他、車で、バスクの村巡り。次いで車でサン・ジャン・ド・リュズ経由でサン・セバスティアンへ行き、1 泊。最後はビルバオの市内見学の後、ビルバオ空港から、フランクフルト経由で成田へ（機中泊）の 10 日間の旅でした。

「世界入りにくい居酒屋」のツールーズ編で紹介していた Café Authié(オーティエ)で昼食を取ったのですが、地ビール、地元料理に大満足。名物親父は居なかったものの、NHK の取材を受けたことは自慢らしく地元の 4 誌が掲載した記事のコピーが貼られていて、女将さんには歓待されました。

故竹田敏君(10 組)もワインが大好きで「遺骨の半分はボルドー近郊のサンテミリオンのワイン畑に埋めて欲しい」と言っていたと奥様は弔問に訪れた私に仰っていましたが、その後どうなっているのでしょうか？ 葡萄畑（次ページに写真）の中で思わず感慨に耽りました。

これまでの旅行の中で最も余裕のある旅行でしたが、慣れ親しんだミシュラン・ガイド（緑）を良く勉強した上に、ChatGPT に教えを請うたり、ウェブ情報を事前に入手したりして歴史も学んだ上に、娘も各種ガイドブックで情報収集して行ったため、内容が盛り沢山で結構疲れました。ターゲットが分かっていたら Google Map の助けを借りてスマホ一つで最短距離で辿り着けます。前より全てが驚くほど便利になりました。ワインの詰まった重いスーツケースを運ぶのはホテルでの部屋と玄関の間だけと空港内だけと言うのは年寄りには助かりました。最近のビジネスクラスのフル・フラットのシートは流石に寝心地が良く、熟睡出来ました。初めてのリッチな旅行でしたが、十分満足できる旅行でした。

私が出発する直前にはヨーロッパも 30℃後半の暑さの所もあったようですが、滞在中はどこも最高が 25℃前後で涼しかったです。PC も持参しましたのでネットニュースで日本は、特に私の住む鳩山は大変なことになっていることを知っていましたが、帰って来て今はこの残暑にぐったりしています。

撮った写真は2,300枚超。以下一部を掲載します。



「入りにくい居酒屋」Café Authié(オーティエ)



カルカッソ
ンヌの古城



ガロンヌ川に面した旧証券取引所前の水鏡



サンテミリオン
村のブドウ畑



モンテ・イゲルドから見たサン・セバスティアン



ビルバオ グッゲンハイム美術館前のパピー